ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館　編集：松居友
日本公演特別号（２０１８年）

不登校や、悩みを抱えた若者や家族たちが
ミンダナオ子ども図書館を訪れると、
戦争孤児や家庭崩壊を体験しながらも
笑顔で生きる子たちを見て感動し、
未来への希望、生きる力がよみがえる。
訪れた日本の子供や、若者たちの心にも、
将来の夢や希望がわきあがり、
引きこもりで、不登校だったにもかかわらず
その後、大学に行きたくなって、
頑張って、サポート校やフリースクールを卒業し
ミンダナオ子ども図書館のダバオハウスに住み込んで、
ダバオの大学に留学予定の若者もいる。
日本の自殺率は、事故死を含むと世界でも最高レベル。
一方、フィリピンの自殺率はアジアでも最低。
そうした現状に心を痛め、ミンダナオ子ども図書館を
日本の青少年だけでなく、一般家庭や母子家庭
さらに、孤独な中高年や支援者の方々が、
泊まって心を癒せる場所にも、することに決めた。
８０人の子供たちが、共同生活している本部や、
マノボ族の住む山の下宿小屋に加えて、
今年から、白浜の素朴な漁村サンタマリアに、
海の下宿小屋も建てて、
訪問者の方々も、お客様ではなく家族として、
宿泊費はなしで、滞在できるようにした。
サンタマリアの漁村や、キアタウの山村体験で
生きる力をもらって帰る、日本からの訪問者たち。
友情と愛こそが生きる力。

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL

日本の若者や子どもたち中高年の方々が、ミンダナオの子ども図書館の子供たちに囲まれて、いっしょに歌ったり踊ったり遊んだりすると、必ずといって良いほどに感動して、帰りがけに泣き出される。

池上彰さんの番組で、テレビ取材に来られたパックンや、「なぜここに日本人・マノボ族の首長になった日本人」撮影に来られたディレクターも泣かれた。聞くと次第にわかってきたのが、日本にいるときの孤独感だった。

日本の青少年の引きこもりや自殺率は想像以上で、事故死も含むと世界最高のレベルだという。一方のフィリピンは、アジアでも最低レベルだ。

だからといって、日本がどうしようもないわけではなく、ゆとり世代の若者たちは、結婚して子どもが生まれても、父親が赤ちゃんを胸に抱いて家族で散歩をしていたりするし、自然の美しさや、武器を持たない安全な社会といった、他国にはない良さがあって、アジアや世界の人々が、日本を訪れたくなる気持ちは良くわかる。

これからの日本の未来は、戦争ではなく平和を作る国として、アジアのなかで、世界の中で、心の壁をとりさって、とりわけ近隣の国々と、友情と愛をもってつきあって行くことだろう。

生きる力ってなんだろう

ミンダナオの子どもと日本の子ども

松居友

日本からの訪問者たちのほとんどは、最終日のお別れ会のときに、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちに囲まれて、お別れの歌をうたってもらい、手をにぎられ抱きつかれると泣き出す。なかには、現地に到着したとたん、大喜びで迎えてくれる子どもたちに囲まれて、茫然自失となったあげく、ワッと泣き出す若者もいる。

「どうしたの?」驚いてぼくがたずねると、彼はこう答えた。

「ぼく、こんな体験、いままで日本で、一度もしたこと無かったんです。こんなにたくさんの子どもたちの、明るい笑顔に囲まれて、手をにぎられて、抱きつかれて・・・。」

聞くところによると、ミンダナオ子ども図書館に到着したときは、日本にいるときと同じように、「自分と人との間には距離をたもち、壁を作らなくてはいけない」と、思ったという。

ところが、いくら努力しても、ここの子どもたちに囲まれてしまうと、心の壁がどんどん壊されていって、何が何だかわからなくなって、とつぜん涙があふれ出てきたのだという。

「でも泣いた後に、今まで知らなかった別の自分が、心の奥底から湧き上がってきたようで、幸せで幸せで！

こんな経験は、生まれて初めて！」

日本では、生まれたときから、たとえ友だちどうしでも、意識的に距離をたもち、あるていど心に壁を作りながら生活しないと、やっていけなかったのだという。

小さいときは、保育園や幼稚園の園庭で遊ぶのがせいぜいで、小学校にあがっても、こちらの山の子どもたちのように、放課後に子どもたちだけで徒党を組んで、野山を駆けめぐったり、

川でカエルやザリガニを捕ったりする体験もなく過ごしたのだという。さらに中学校に入ると、放課後は学習塾か、運動部の部活で、勝ち負けを重視したバスケットやサッカーなどのゲームをやらされたのだという。

「そんなとき、運動のできる子はスターになるけど、ぼくは運動神経がにぶかったから馬鹿にされて、『おまえなんか、でなくっても良いよ。引っこんでろ！』って言われたんです。そのあたりから、だんだん学校に行くのが嫌になって、引きこもりになっていった・・・。」

聞くと、彼は、中学に進学したものの、受験競争を勝ちぬくために学習塾にいかされて、とうとう登校拒否をおこしてしまったのだという。

「でも両親とも働いていたから、家にいても部屋に閉じこもって、スマホあいての孤独な生活だった。でもここに来ると、子どもたちのようすがぜんぜん違う！」

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、年齢や宗教や民族は違っていても、子どもどうしの間に壁がなく、外国人の自分にさえ、心を開いて飛びついてきたのでビックリしたそうだ。

日本から訪れたべつの少女も、帰りがけにこう話してくれた。

「わたし、ミンダナオに来て、本当に良かったわ。ここの子どもたちだけじゃなくって、連れていってもらった山の村や、近所で遊んでいる子どもたちも、血がつながっていいなくても兄弟姉妹のように、歳上の子が、赤ちゃんのめんどうを見たり、下の子が、お姉ちゃんやお兄ちゃんにめんどうをみてもらったりしている姿が、とっても温かく感じられて良かった。

とくにここに住んでいる子たちは、宗教や種族がちがっていても、みんなでいっしょに楽しくおしゃべりしながら、洗濯や掃除をしたり、花壇や野菜の手入れをしたり、ご飯を炊いたりしている。そして、わたしの手も引っ張って言ってくれたの。

『いっしょに遊ぼう！』

『いっしょにお料理しようよ！』

『お洗濯、いっしょにしない？』

『お花、頭にさしてあげるね！』

わたし、こんな体験、はじめてで、思わず涙があふれてきちゃった。」

そんな、若者たちの話を聞くにつれて、今の日本の若者たちが置かれている、孤独な状況が見えてきた。

ミンダナオ子ども図書館を立ちあげて十年間は、現地活動にいそがしく、現地の子どもたちに心を集中させるためにも、なるべく訪問者を受けいれない形ですすめてきた。けれども、孤独な日本の若者たちが、現地の子どもたちと出会って感動し、生きる力をえて帰っていく様子をみるにつけて、日本の若者たちを、放っておくことが出来なくなり、彼らが心を癒やす場として扉を開くことに決めた。

そのご数年間、訪問してくる若者たちの様子を観察し、危険地域であるがゆえに訪問規定もしっかりと決め、お客様としてではなく、自然でありのままの兄弟姉妹家族として、友情と愛で訪問者を迎えるためにも、宿泊費もとらないことにした。

とりわけ不登校や引きこもりで心が傷ついていたり、自殺未遂をくり返していたりしていた子たちの場合は、心を癒やす場として、一ヶ月ほど滞在したりもできるようにしている。

日本から来た若者たちを見ていると、ミンダナオ子ども図書館を訪れてから数日たつと、顔つきがどんどん代わっていくのがわかる。まるでその辺に咲いている花々や、空を飛んでさえずっている小鳥たち、とりわけいつも彼を慕っていっしょに遊ぶ子どもたちと同じ、自然で和やかな顔になっていく。引きこもりだったという若者も、いよいよ、お別れの日が近づいて来ると、ぼくにいった。

「できれば、ここに住みたいぐらい。本当に日本に、帰れるかなあ？」

最終日の夜、子どもたちに囲まれて、別れの歌を唄ってもらうと、最後は抱きあいながら大泣きに泣いた。

「帰ってくるからね。必ずまた、もどってくるからね。ぼくのこと、忘れないで！」

そして翌日、ダバオの空港に送りとどけると、旅立ちの前にこう語った。

「日本では、つらいこと寂しいことが、本当にたくさんあって、時には死にたいと思ったけれど、もう大丈夫！いざとなれば、ここに来れば救われるから！」

「うん、いつでも訪ねておいで。ここは君のセカンドハウスだからね。再会のときは、子どもたち、もっと喜ぶよ！」

だんだんわかってきたのは、貧しくても、友情と愛の力で生きぬいていく彼らの生きる力の豊かさだった。戦争や病気や家庭崩壊で、親がいなくなっても、たとえ、路上をさまよっても、彼らは引きこもらないし、自殺もしない。

「なぜ、孤独になっても死なないの？」と、聞いたらこう答えた。

「だって、友だちがいるもん！」

「だれかが、助けてくれるもん！」

世界のすべての人々が、そんな子どもたちを見習って、心の壁を作らず、国境を越えた友情と愛を心に助け合えれば、世界から戦争や貧富の格差は消えていき、本当の平和が実現できる。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

マラウィの戦争避難民の子供たち
この子たちの支援者になっていただけませんか！

Maila M. Malik（マイラ M. マリク）

日本の皆さん、こんにちは。私の名前はマイラです。2007 年 7 月 5 日生まれの 11 歳です。マラナオ族でイスラム教を信仰しています。7 人兄弟の末っ子に生まれましたが、お兄ちゃんが病気で死んでしまったので、今は 6 人兄弟です。

住んでいたところは、ミンダナオ島マラウィ市の、昨年戦闘になった区域「グラウンド・ゼロ」です。家は、戦闘で壊れてしまいました。マウテグループの戦闘が始まり、2017 年の 5 月 25 日に、セント・エレーナ避難所に家族で逃げてきました。今は、避難所から小学校に通っていて、学年は 3 年生です。この 6 月に 4 年生に進級する予定です。

お父さんは警察官だったけど、この戦争に参加して亡くなりました。お母さんは元気ですが、避難所に来てからは仕事がありません。マラウィにいた頃お母さんは、小さなお店をしていました。でも、避難所で配給のお米などをもらえるので、毎日ご飯を食べることができます。避難所での生活は大変だけれど、毎日ご飯が食べられるのはうれしいです。マラウィにいた頃の学校の友達に会えなくて寂しいけれど、避難所から小学校にも行っています。6 人の兄弟の中で、今は私だけが勉強を続けています。

今回、キダパワンまで付き添ってくれた 20 歳のお姉ちゃんも、小学 3 年生で学校を止めてしまいました。私は、勉強するのが好きです。特に、フィリピノ語の授業が好きで得意です。将来は、大学の教育学部で勉強して、小学校の先生になるという夢があります。だから、学校を止めたくありません。

ミンダナオ子ども図書館の奨学金は、日本の皆さまからのサポートで支えられているのですね。私と同じように、お父さんを戦闘で亡くしたり、戦闘から避難していたり、貧しい子どもたちが学校に行くのを助けてくださって、どうもありがとうございます。

MCL では、たくさんの子どもたちが私たちを歓迎してくれました。私は、マラナオ語とタガログ語を使うので、同じイスラム民族でも、MCL の子たちが話すマギンダナオ語や、クリスチャンのビサヤ語に慣れませんでしたが、同じ歳くらいの女の子たちがたくさん話しかけてくれました。キダパワンで、初めてたくさんのマノボ族の友達ができました。今回は、MCL にお招きいただき、どうもありがとうございました。

マラウィの避難民キャンプ。すでに一年、家も破壊されて帰れない家族たち。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール： mclmindanao@gmail.com 現地日本人スタッフ 宮木梓（あずさ）
FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

Norjannah E. Panontongan
（ノルジャナ E. パノトンガン）

アッサラーム・アライクム！初めまして。私の名前は、ノルジャナといいます。1997 年 7 月 19 日生まれの 20 歳で、マラナオ族です。信仰はイスラム教です。

私には、25 歳の兄と、18 歳の妹がいます。兄は高校を止めてマニラに出稼ぎに行って、もう 3 年になります。なかなか会えませんが、フェイスブックで連絡を取っています。18 歳になる妹は、結婚して高校を止めてしまいました。私たちには、もう一人弟がいたのですが、生まれてすぐに死んでしまいました。私が小学 3 年生のことです。母も、弟を生むときに体調を崩し、亡くなってしまいました。

母が生きていたときは、露店でネイティブコーヒーや、ショウガやトマト、ニンニクなどのラマスと呼ばれる味付け用の野菜を売っていました。父は、バゴスやティラピア、ガルンゴンという名前の魚を仕入れて、市場に卸す商売をしていました。でも、私が小学 6 年生の時に病気で亡くなりました。咳が続いていて血を吐いたので、結核だったのかもしれません。家にお金がなく、病院に連れていくことができませんでした。両親を失った後、私はアラビア語の教師をしていた祖母に引き取られました。でも、その祖母も、私が高校生のときに亡くなり、私は母の妹のところに身を寄せました。高校生になってからは、ワーキングスチューデントとして働きながら勉強を続け、高校を卒業しました。そして、大学に進学しましたが、大学 1 年生が終わったところでマラウィで戦闘が始まり、大学に行けなくなってしまいました。大学が戦闘地にあり、危険だからです。その後 10 か月を、大学に行けずに避難所で過ごしています。

昨年 5 月 23 日に戦闘が始まり、戒厳令が出ました。私たちは、5 月 25 日に、グラウンド・ゼロからゲイラン避難所に逃げてきました。爆弾や、IS の兵士たちが怖くて、ずっと泣いていました。IS の兵士たちは、マスクで顔を隠していましたが、18 歳から 20 歳くらいの青年に見えました。彼らは、大きな銃を持ち、「アッラフ・アクバル」とだけ話していました。彼らと出会っても、ムスリムのショールを巻いていれば「行け」と言われ、逃げることができました。イスラム教徒以外の人たちがどうなったのかは知りません。雨のように爆弾が降り、たくさんの人が亡くなりました。私たちが家を捨てるまでに、準備にかけられた時間は 5 時間程で、携帯電話や身分証明書など貴重品のみを見につけ、トライシクルで避難所まで来ました。避難所では、調理道具やお皿、服などを支給されたので、生活することができています。私は、母の妹夫婦とその子どもたちと避難所で生活しています。私の妹夫婦も、ゲイラン避難所の近くのホームベースにいます。避難所は人が密集していて、あまり清潔ではなく騒がしいですが、福祉局からの支給で食べていくことはできます。でも、早く大学に戻りたいです。同じ大学で学んでいた友達は、みんな学校に戻れていません。

私は、小学校の先生になりたくて大学の教育学部で学んでいましたが、もし MCL の奨学生になって大学に復帰する場合は教師か、ソーシャルワーカーで進路を迷っています。私と同じように、両親を亡くした子どもたちの助けになるような仕事をしたいです。兄と妹は、勉強を続けることをあきらめましたが、私は高校を卒業してやっと大学生になることができました。大学を卒業するまで、あきらめたくないです。

昨日、朝早くにマラウィの避難所を出て、暗くなってようやく MCL に着きました。車に酔ってしまい、とても疲れていましたが、MCL の奨学生たちがメインハウスに集まって、歓迎会の準備をしてくれていました。それぞれの民族の歌で歓迎されて、とてもうれしかったです。マラウィの避難民たちへのご支援を、どうもありがとうございます。戦闘が終わり、人々の関心が薄れている中で、日本の皆さまからのご支援はとても励みになります。

どうもありがとうございました。

「ゆめポッケ」をもらって大喜び。

（銀行振込、ネットバンキングも可能です）
■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）
■口座番号　0018057

戦争で破壊された マラウィ市の状況

松居友

激しい空爆もふくむ戦闘で家も崩壊して、マラウィ市から逃げてきた、戦争避難民の子どもたち。今回は、5回目の支援。前々回までは、生活物資を補給する緊急支援。しかし、今回は、次の段階の奨学生支援が目的でした。戦争で悲惨な目に遭った子達の中でも、特に孤児や親を失った子、母子家庭などで生活が困窮している子達を、奨学生に採用して、本部に住み込んで、大学まで行かせてあげるため。

すでに本部には、80人ぐらいが住んでいて、その子たちを加えると、100名ほどが住むことになります。外部に住んでいる奨学生も、全部合わせると453名。

「いったん受け入れたならば、大学を出るまで十数年以上、我が子のように面倒を見ていかなければならない。」と思うと、それなりの覚悟が必要。

マラウィ市の中心部は、激しい空爆と砲撃と地上戦で、建物が徹底的に破壊されてしまい、砲弾で穴の開いたモスクや、空爆で破壊されたコンクリートの建造物が、生々しい瓦礫となって崩壊したまま建っています。

そのようなこともあり、避難民たちは、未だに政府の指定したキャンプ場のテントや屋外体育場の屋根の下で過ごしていて、すでに10カ月近くたった今でも、まったく帰宅の目途が立たずに、避難民生活を送っている状態ですが、その中でも今回は特に、親のいない子、家も破壊されて祖母だけで、帰るめども全くたたずに、学校も行けずにいる子などのインタビュー。すると、ほとんどの子達が、話しながら耐え切れずに泣き出すのでした。

子どもが未来なのに、なんで大人たちは、子どもたちを悲しませる、戦争なんかするの？

「現地の人だけではなく、国際停戦監視団やNGOでも、容易に入れないと言われている反政府地域に、武器も持たずに、良く入っていけますね、怖くないですか？」と、良く聞かれます。

正直に言って、怖いと思うときもあるけれど、「そこに、子どもたちがいる」と思うと、スウーッと恐怖が消えていき、心に愛情がわいてきて、「いかなくっちゃ。命をうしなっても！」と、思うから不思議。ぼくにとって心のよりどころは子どもたち。

皆様、とりあえず数年でも結構ですから、ぜひ支援者になったくださいね。そして、会いにいらしてください。信じられないぐらい、大喜びしますよ！

NPO法人『MCL ジャパン

代表理事　前田容子

MCLジャパンは、ミンダナオ子ども図書館（MCL）を日本サイドからサポートするという目的で、2011年11月に、特定非営利活動法人（NPO）として設立されました。現在、理事3名、監事1名で構成しています。

皆さま方からのご寄付は　おもに郵貯銀行の振り替え口座に送金いただいていますが、その口座を管理し、MCLへの送金業務を行うのが　大きな仕事です。ご寄付に対する受領礼状、領収書の送付、お問い合わせなどへの対応、そして、現地日本人スタッフ宮木梓さんとの連絡調整、情報管理などを行っています。

昨年は全国814人の方から、総額34,157,690 円のご寄付をいただきました。おかげさまで毎月200万から300万円を現地に送金することが出来ました。現地MCLでは、ご寄付額にもとづきながら、月々の運営計画をたてたものを、さらに理事会で検討し、州福祉局の承認をへて予算を執行し、公認会計士の監査も行っています。

MCLジャパンの活動としては、松居さん、エープリルリンさんの講演会、集会を全国で行い、また奨学生とスタッフが来日し、全国の学校や集会などで、ミンダナオ島の民族舞踏と歌を披露する公演を行っています。

これらの経費として、松居友さん、エープリルリンさん、宮木梓さんへの給与、各人月6万円（事務局は無給のボランティア）さらに今年は、MCL ジャパンの事務通信費、交通費138,193円。ミンダナオへの往復を含む交通費、講演関係交通費、事務通信費1,081,473円。公演関係交通費、事務費484,738円です。

寄付総額の9％強を日本での活動費として使わせていただき、寄付の90.8％は、現地に置ける600人弱の子ども達の学費、生活費、医療費に、読み語り、保育所建設、植林、緊急支援その他その他の多くの活動費、運営費、交通燃料費、事務通信費、子ども達の世話をするスタッフの人件費等に使われています。

今年17年目をむかえたミンダナオ子ども図書館が、今後も続いていくことが出来か否かは、皆さま方の変わらぬお支えのおかげと、深く感謝申し上げます。（なかには、100円ご寄付くださる幼稚園生もおられ、礼状を書きながらにっこりしてしまいました。）

今後とも、ミンダナオ子ども図書館をどうかよろしくお願いいたします。

困難な中でも、たくましく生きる子どもたちを、知っていただくためにも、ぜひ読んでみてください。そして、いつか会いに、いらしてくださいね！

絵本や本は、いつも側にいてくれます。書店で買って、読んでくださいね。本の売り上げや印税も、活動費に満てています。

今人社　定価１６００円

今人社　定価１６００円

彩流社　定価１８００円

「MCL文庫」と「映像サイト」も、立ち上げました！

日本に滞在しはじめて、最初に驚いたのが引きこもりと不登校、そして青少年の自殺率の高さでした。また次第に見えてきたのが、現職のビジネスマンを含む中高年の方々、取りわけ、退職後の高齢者の方々の孤独でした。そうした方々から、しばしば耳にするのが、ミンダナオ子ども図書館のサイトが、大きな慰めになっている、という言葉でした。

特に、引きこもりの青少年の子どもたちや、貧困家庭で親がいないで、一人で家にいる青少年たち、また、高齢化した社会のなかで、孤独で、時には本を買うお金も無く、外にも出られない高齢者の方々が、サイトの子どもたちの写真を見たり書かれている文を読まれたりして、落ちこんだ心が慰められる事もわかってきました。

そこで、考え続けた末に、孤独な世界から飛びだしてもらえればと、ミンダナオの子どもたちが持っている明るく暖かく、貧困でも愛と友情と生きる力に満ちた、「ミンダナオの風」をお届けして、することにしました。

検索「ミンダナオ子ども図書館：日記」http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanewsdaiary.html

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

踊りと唄の日本公演

数年前から、踊りと歌の公演を、幼稚園から小中学校、高校、大学にいたる学校や、お寺の境内や教会や講堂やホールで行ってきました。

その反響が、予想以上にすばらしく、日本の皆様方が、宗教や部族が違っていても、兄弟姉妹、家族となって、明るく歌い踊る、MCLの奨学生たちのようすに、驚きと感動を示され、時には涙を流しながら、「目の輝きや笑顔に、生きる力が感じられる。」「自分の子供時代を思い出すわ。」などと、おっしゃるのを聞いて、この活動は、日本の青少年や、中高年の方々のためにも、またMCLの奨学生たちのためにも、続けていこうという強い思いになりました。

そこで毎年4月10日～6月10日に、ミンダナオ子ども図書館の奨学生たちが、日本各地を巡って、先住民、イスラム、クリスチャンの伝統的な踊りや歌を披露することに決めました。

ミンダナオ子ども図書館の奨学生は、戦争で親が殺されたり、貧困で家庭が崩壊したりした、小学生から大学目での子たちで、現在450人。その中から、ビザの取得が容易な高学年の若者たちが、毎年異なった顔ぶれで来日します。

奨学生

Mariza E. Linao （女性）

17歳　マノボ族／ビサヤ族

私はマリサで、マノンゴル高5年生です。MCLの敷地内にある女子大生寮に、昨年から住んでいます。アラカンの山あいの村、キアタオが私の故郷で、プロテスタントを信仰しています。

父はマノボ族で、母はビサヤ族です。

両親は8年前に離婚しました。父が突然、精神的におかしくなり、誰かに殺されるという恐怖に取り付かれたからです。私は3人兄弟の真ん中ですが、母が妹を連れて家から逃げ、私と兄が父の元に残されました。母はダバオで新しい恋人ができ今は子どももいます。妹は母の所から高校に通っています。

私と兄はMCLの奨学生になり、兄はキダパワンのMCLの寮から高校に通っています。私は将来、大学で心理学を勉強して、教育関係の仕事に就きたいです。

母に置いて行かれて家族がばらばらになったことは辛かったけれど、この経験を通して私は強くなりました。将来の目標があって、勉強を続けられたから、自分の人生を受け入れられたのかもしれません。

私は、小さな頃から日本に憧れていました。カリナン出身の母の曾祖父のどちらかが、日本人だと聴いていたからです。今回、第二回目の訪問ですが、日系人の私の祖父が、なんと日本の千葉に住んでいることがわかりました。連絡がとれたみたいで、日本で会えることになっています。

興奮しています！

Valentine H. Rarugal （男性）

18歳　イロカノ族

僕は、バレンタインズデーに生まれたので、バレンティンと名付けられました。この4月に小学校を卒業して、マノンゴル高校に進学予定です。プロテスタントを信仰しています。出身は、マタラムのキビヤ村で、8人兄弟の6番目に生まれました。

僕の本当の父は、母が僕を妊娠中に、タンドゥアイ（ラム酒）の飲みすぎで、体を壊して亡くなったそうです。母は再婚し、子どもが2人できたけど、再婚相手もお酒の飲みすぎで亡くなりました。母は心の病気になってしまい、僕は10歳までルソン島の祖母に育てられ、その後ミンダナオの母の元に戻りました。

僕が奨学生になったのは小学2年生、13歳の時です。その頃、僕はあまり学校に行かず、不良友達とフラフラしていました。ある日、友達とバイクを盗もうとしたら、警備員に見つかりました。友達は警備員に打ち殺されましたが、僕は福祉局に保護され、MCLを紹介されました。その時からMCLに移り、5年目です。

将来の夢は、勉強を続けて高校を卒業することです。ものを作るのが好きなので、大工か農業をしたいです。

Walter Jhon D. Magbasa （男性）

18歳　マンダヤ族／ビサヤ族

僕は、ウォルタージョンという名前だけど、「ドドン」と呼ばれています。南ミンダナオ大学キダパワン校2回生で、自動車経営学を専攻しています。信仰はカトリックで、出身はダバオ・オリエンタルのマティという町の近くです。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

今回は、2回目の訪問ですが、前回の訪問で日本のバンドの方々に「楽譜が読めないのに、ギターの技術が天才的！」といわれて、友さんやエープリルリンさんから、毎回同行するようにいわれました。

実家は、山にあって、時々一日3食たべられないことがあり、お米が買えず、トウモロコシをよく食べました。7人兄弟の上から2番目です。兄弟が多く中学高校は無理なので、小学6年生に奨学生になりました。その時からMCLに住んでいます。

僕の夢は、プロのギタリストになることです。母が山の礼拝所で、ギターを弾いていたので、小学校6年生の頃からギターを始めました。ミンダナオの様々な民族の踊りをぜひ観に来て下さいね。僕も歌に合わせてギターを弾くので、聴いて下さるとうれしいです。

Richard B. Rutang（男性）

20歳　マノボ族

僕の名前は、リチャード。キダパワン高校の6年生で、MCLの寮に寄宿しています。出身はアラカンのラナオコラン村のキロハスで、信仰はプロテスタントです。小学5年生の時に、MCLの奨学生になりました。もし、僕が高校を卒業できれば、キロハスで二人目の高校卒業生です。来年の4月に高校を卒業したら、南ミンダナオ大学キダパワン校で、電気工学を学びたいです。将来は、電気技師になるのが夢です。

僕は6人兄弟の長男なので、就職して、弟や妹も、高校や大学で学ばせてあげたいです。両親は、キロハスでお米とバナナとゴムを育てています。お米は山で育てる陸稲です。それらを売って現金を稼ぎますが、安く買われるので、僕たち兄弟の学費には足りません。うちは竹とニッパ椰子でできた家に住んでいるし、ご飯も時々3食食べられません。でも、子どもたちが勉強を続けたくなる様な見本になりたいです。

日本に行くメンバーに選ばれて、思わず飛び上がってしまうほどうれしかったです。日本では、僕たちマノボの文化や、僕たちの暮らしを紹介したいし、日本の子どもたちの生活の様子も知りたいです。お互い、いい友達になれたらいいな、と思います。

Honey Lee A. Caligid（女性）

19歳　ビサヤ族

ハーイ！私はハニーで、マノンゴル高校6年生です。来年の4月に卒業予定で、今は卒論を制作中です。とても難しくって頭が痛くなっちゃうけど、勉強は楽しいです。高校を卒業したら、南ミンダナオ大学キダパワン校で経営学を学びたいです。将来は会社で働きたいの。私は8人兄弟の4番目で、弟や妹たちにも勉強を続けてほしいから。

私の父は、私が13歳の時に銃で殺されました。父はバナナを育てていたけど、近所の人に売ったバナナのお金を返してもらうように言ったら、撃たれてしまったんです。その日は、私がMCLの奨学生に採用された日の夕方だったから、とてもよく覚えています。

私の兄と、2人の弟、1人の妹もMCLの奨学生で、私が小学6年生のときからここに住んでいます、スタッフや奨学生たちはまるで家族の様で、とても楽しいです。父が死んで、母も仕事がなく、私も母と上手くいかないこともあったけど、夢をあきらめていません。辛い経験があっても強くいられるし、笑っています。

日本では、伝統に触れたいです。着物を着たり、温泉にも挑戦してみたい。服を全部脱ぐんでしょ！食べ物は薄味だって聴いたけど、フィリピンにないものを食べてみたいです。トイレにも、バケツとひしゃくがなく、ボタンを押して水を流すそうです。水の流し方が分からなかったら、どうしよう！不安もたくさんあるけれど、新しい体験や、新しい友達に出会えることを、楽しみにしています。

Menrose B. Landas（女性）

19歳　マノボ族

日本の皆さん、こんにちは！私はメンローズといいます。信仰は、プロテスタントです。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。
貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。
保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている
２００名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。

ノースバレー・アカデミー大学の1回生で、エックス線技術を学んでいます。大学での勉強は、難しいけど楽しいです。大学を卒業したら、エックス線技師として病院で働きたいです。

私は小学3年生の時、学校をMCLが訪れ、先生が私を奨学生に推薦してくれました。私の兄弟が多かった（9人兄弟の上から6番目です）のと、授業に積極的に参加していたからです。

両親は、山でバナナとハヤトウリを育てて収入を得ていますが貧しく、私はMCLの寮に住んでいます。ルームメイトたちと過ごす時間は、とても楽しいです。他の民族の奨学生とも、お互いの夢を話したり、協力してご飯を作ります。友情の大切さを学びました。

日本に行くメンバーに選ばれて、とてもとてもうれしいです。まさか、自分が選ばれると思っていませんでした。日本の皆さまに、私たちの文化や伝統を伝えられる、神さまが与えてくださった運命を感じました。日本でお会いできるのを、とても楽しみにしています。

Ricky L. Mundog（男性）

26歳　マノボ族

こんにちは！私の名前は、リッキーといいます。プロテスタントです。アラカンにあるドロローマン科学技術大学の4回生で、来年10月に卒業予定です。農学部で勉強して、専門はプランテーションで育てる作物、例えばココナツ、ゴム、アブラ椰子、パイナップル、バナナ、コーヒー、カカオ、サトウキビについて勉強しています。

MCLの奨学生で、農業を専攻する学生は珍しいです。私は大学で学んだ農業の技術を故郷の貧しい農民たちに伝えて、生活が良くなる助けをしたいんです。

僕の父は、牧師でしたが15年前に病気でなくなりました。何の病気だったかは、分かりません。母はその後再婚し、私は新しい父とも母とも、それなりに上手くやっています。私は5人兄弟の3番目ですが、兄弟の中で自分だけが高校を卒業しました。

歌うことも、踊ることも好きです。MCLの学生総会は、いつもとても楽しみです。特に6月のマノボデーは、他の民族の奨学生に自分の文化を紹介できるので、張り切ります。日本でも、たくさんの方に観ていただければいいな、と思います。自分を支援して下さっている方々に、お礼を伝えたいです。

Dina Marie T. Bade（女性）

18歳　イロンゴ族

私は、ディナマリー。イロンゴ族で、モルモン教徒です。ノースバレー・アカデミー大学の情報技術科3回生で、キダパワンにあるMCLの寮に住んでいます。コンピューターのプログラミングなど、パソコンを長く使って勉強するので、目が痛くなることもありますが学校はとても楽しいです。大学を卒業したら、オフィスワークに就くのが夢です。

私の両親は離婚して、父はゼネラル・サントスで働いています。今でも時々、お金を送って生活を助けてくれます。母は、マニラに出稼ぎに行き、子守りをしています。なかなかミンダナオに帰ってくることができないので、さみしいです。私が故郷の家に帰る時は、祖母のところに帰ります。家族がバラバラになってしまいましたが、それでも私は幸せで、毎日楽しんで生活しています。友達やクラスメイトが、いつも私を幸せな気持ちにしてくれるからです。MCLの寮で、違う民族の子たちと過ごすのも楽しいです。日本の皆さんも、いつも幸せでいて下さいね。

4月に日本の公演に参加できることになって、とても興奮しています。サクラを見てみたいんです。

Alparapy A. Awal（男性）

19歳　マギンダナオ族

僕の名前はアルパラピー。イスラム教徒です。ピキット高校の6年生です。学校では、たくさんの知識を得られるので、とても楽しんで勉強しています。来年高校を卒業したら、南ミンダナオ大学カバカン校の教育学部で学んで、将来は高校の先生になりたいです。子どもたちに麻薬を使わないよう怖さを教えたいんです。

僕たちのところでは、隠れてマリファナを育てて売っている人がいます。葉っぱをタバコのように吸うのですが、高校生でも買えるほど安いんです。子どもたち

の将来のために、教育はとても大切だと思います。

それに、先生になれば家族を経済的に楽にできます。僕の父は、川で魚を採ることを生業としていますが、現金収入は少なく、僕たちの学費を払うことが難しいです。母は、父を手伝ったり、家で洗濯や炊事をしています。僕は5人兄弟の上から3番目です。僕が小学4年生の時、MCLがサパカンを訪ねて、調査をし、奨学生に採用されました。学校の違うマノボやキリスト教徒のメンバーとも親しくなり、練習中はいつも笑っています。

日本では、人々が一体どんな暮らしをしているのか、興味があります。僕らはイスラム教徒で、「豚肉を食べてはいけない」など、コーランに従って生活していますが、日本にはどのような風習があるのか、見てみたいです。

スタッフ

Janisa W. Pandian（女性）

23歳　マギンダナオ族

私はジャニサで、イスラム教徒です。この6月からMCLのスタッフとして、医療支援を担当しています。

大学では、コンピューターと電気工学を学びました。今の仕事は大学の専

攻とは違いますが、ずっとMCLで働きたかったので、とても楽しんでいます。

病気やけがで困っている奨学生たちの手助けをできることは大きな喜びです。それに、マラウィの戦闘から避難している人々の支援にイリガンに行くこともできました。避難所でムスリムやマノボ、ビサヤの歌を歌っているとき、泣いているマラウィの人がいました。スタッフとして、人々を助ける仕事に関われるようになったのがうれしいです。それに、お給料で家族を助けることもできるようになりました。

日本では、特に子どもたちと幸せな気持ちを分かち合いたいです。毎日忙しすぎたり、深刻に悩んでいる子どもたちを、少しでも笑顔にできたら、と思っています。歌やダンスを、日本のたくさんの人々に観ていただけたらうれしいです。そして、支援のお礼を直接会って言いたいです。

Pitty Boy G. Lanay（男性）

25歳　マノボ族

こんにちは。私の名前は、ピティボーイです。MCLのスタッフとして会計で働き始めて3年目になります。信仰は、マノボ族の神さま「マナマ」を信じ、伝統的なお祈りをします。10人兄弟の2番目に生まれました。

私は、小学1～2年生はパコパコ小学校、その後ミオカン小学校で学びました。昔はパコパコは小学2年生までしかなかったのです。学校はとても遠く、片道3時間かけて歩いて通っていました。高校はラナオコランで、寄宿するお金がなかったので、空き家に友達5人で住んで通学していたときもあります。小学3年生から高校を卒業するまで、イタリアのファウスト神父の奨学生で、学校で使う文具や宿題に必要な模造紙などを買うのを支援してもらいました。

高校を卒業後、奨学金がなくなり、1年間実家でバナナやカカオ、コーヒーなどをつくるのを手伝っていましたが、MCLの奨学金のことを知り、応募しに訪ね、採用してもらえました。

セントラルミンダナオ大学を卒業

しました。大学では、経営学を学びました。私は村で初めて高校、大学を卒業した子どもでした。今では、パコパコ小学校の卒業式の来賓に呼ばれ、スピーチをします。

私がMCLのスタッフになったのは、大学卒業後帰っても仕事がなく、キダパワンに残りたかったからです。それに、同じマノボ族の奨学生たちに、教育の大切さを伝えたいと思っていました。働き始めたときは、覚えることが多く大変でしたが、今ではずいぶん慣れて楽しんでいますし、自分の仕事が好きです。

信仰や文化の違う私たちが、一つになって歌やダンスを披露するのを見ていただけるとうれしいです。

日本の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

子どもたちの日本公演や松居友、エープリルリン等の講演会、報告会、家庭集会にお声がけください。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
講演や家庭集会の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。
メール：mcltomo@gmail.com

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になっても治せないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援・・・自由寄付
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と年一回絵本をお届けします。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つかっていないにも関わらず、放っておけず採用している１４０名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている２００名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

２，植林環境支援・・・６万円（ゴム、カカオの木６００本、１ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。

３、保育所建設支援・・・９０万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、１３０万円で可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。特に何らかの事情で保護を必要としている子は、本部や下宿に住み生活を保障（現在約 200 名）。
支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

１，大学生スカラシップ支援・・・年額７００００円（月額５８３３円）
２，高校生スカラシップ支援（日本の中高生）・・・年額６００００円（月額５０００円）
３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円（月額３３３３円）
スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」等の希望を書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。
その後、機関誌に同封して高校・大学生の場合は本人からの手紙（英語）、６月にスナップ写真、８月に成績表、１２月にはカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して当人に渡しています。小学生の里子の場合は、絵手紙です。プレゼントは可能ですが、まだ字を読んだり書けない子も多く、文通はできせん。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAX で日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCL に宿泊していただき奨学生の自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール mclmindanao@gmail.com 現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）
FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

（銀行振込、ネットバンキングも可能です）■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九 店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

子どもたちの日本公演や松居友、エープリルリン等の講演会、報告会、家庭集会にお声がけください。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
講演や家庭集会の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メール：mcltomo@gmail.com 携帯：080-4423-2998(現地転送)

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines